

井伊直弼「井伊直弼書簡」

安政5(1858)年6月29日

(※返書き)

猶々当夏雨勝にて時候も不宜候折角

御厭被成候様奉存候、龜品相調候印迄に進上

仕候、御賞納希上候、指急き乱筆忝読

跡早々御火中希上候、以上

さるつきみそかひ
去月晦日附の貴翰 拝誦

候、残暑難堰候処 先以愈

御安泰 奉大賀候、寔平日

は事務多端に取紛、意外の

御無音打過恐縮此事に御座候、

今般 蒙大老職 候に付御祝

詞被下、殊に御懇の御書中

千万 忝奉存候、併国家大危

難の折柄、不応の重任 難堰

段々 雖辞退候 厳命 難黙止、

苦心の至 御座候、尚又過日為御吹

ため 聴内使指出候処、御念頭の御

挨拶、殊 御肴頂戴 忝奉謝 候、

抑 墨夷一条に付、深被為脳 ママ

叡慮 候条、御尤の御次第恐入

候儀に御座候、 則応

勅旨 三家並諸大名へ今一応存意

言上 候様 被仰渡、右 上書 大体

出揃候に付、猶御所置の旨 為言上

近々 以使 可被仰進の処、内間

混雑 就中 事実相違の事

共上方筋へ為致流布候 族も

候 趣、正邪不分明の 廉々 至難相

決儀 有之、第一

西城御養君の儀急務の事

に付、去る二十五日 思召の 通御発に可

相成御手続、右濟候は、外夷の御所

置断然と 可取調 含に候折柄、去る

十八日亜船下田よりハルリス並に通弁

の者乗込神奈川へ 致入津、

今度英仏の軍艦と清国の戦に

得勝利、其勢乗し近々日本へ

渡来の由注進候。 當中 評議にも

仮令数十の軍艦襲来候共

京都へ御使 相立候迄は治定の

返答 難相成 筈に候 処、実は内外

あいなりがたき

ところ

奉仰 候

あおぎたてまつり

の危急の大患を抱、是を取鎮候迄は

これ

事に御座候、此度在所への用向申付

ざいしよ

外夷の御所置も存分には 難相成

あいなりがたき

候に付、御礼 旁 時候 為伺 御地へ 為登

かたがた

うかがわせ

のぼらせ

次第に付、 無 抛 場合にて掛り井上信濃守

よんどころなき

申候、日本京地の様子も 伺度。

うかがいたく

岩瀬肥後守兩人仮條約書に調

思召の廉は御内放願上候、実に

かど

印致候次第、今日の事情 不存 者より論候

ぞんぜざる

繁勤 不分 昼夜 執筆の 暇

ちゆうやをわかつたず

いとま

は、

無之心事 相任兼 候間、委曲は 使義言

これなく

あいまかせかね

いきよく

よしときをして

武門の權威 無之様 可申 候へ共、

これなきようもうすべく

言上 候様申付置候。

実に昨今内間の混雜危急に

恐惶謹言

迫り候て、手強に掛合 開争端、洋外

てごわ

かけあいそうたんをひらき

六月二十九日

各国 讐敵 と相成候ては後患 難計、

しゆうてき

はかりがたく

三條前内大臣殿 井伊 掃部頭

かもんのかみ

万一清国の覆轍を踐 候様の儀

ふくてつ

ふみ

御直被

ちよくひ

出来 候ては不容易国家の大事

しゅつたい

と 深 御心配の上、違約戦争は時

ふかく

至候は、如何様 共 可相成 儀に付、先

いかよう

あいなるべき

まず

無 據

よんどころなく

此度の 処 右の御所置に相成

ところ

候次第、委細の訳柄は近々 間部下総守へ

いさい

まなべしもうさのかみ

おおせふくめられさしのぼられ

おおせふくめられさしのぼられ

被仰 含 被指登 候間、右 無 據 次第

よんどころなき

御聞分何卒 公武一致の上

なにとぞ

諸夷も 恐伏 仕 候様の御所置

きようふくつかまつり